

『和泉式部日記』における小舎人童

——女と帥の宮の媒介者——

小林 香 里

はじめに

和泉式部は、平安時代の歌人であり、中古三十六歌仙の一人でもある。長徳二年（九九六）頃、橘道貞と結婚するも、すぐに不仲となる。そんな中で出会ったのが、冷泉天皇第三皇子為尊親王である。為尊親王との交情が世間の噂となるが、為尊親王は病気を患い、長保四年（一〇〇二）に二六歳の若さで没する。為尊親王が亡くなってから寂寥の日々を送っていた和泉式部であったが、長保五年（一〇〇三）四月に故宮（為尊親王）の弟・帥の宮敦道親王から求愛を受ける。この帥の宮と和泉式部との交情を、長保五年四月から翌年の正月

までの十ヶ月間記したものが、『和泉式部日記』である。本作品について磯村清隆氏は、次のように述べている。¹⁾

主人公「女」の立場から二人だけの「忍びの恋」を描き上げるこの作品には、本来なら、当事者同士つまり主人公と恋の相手さえいれば、一応の登場人物としては最小限こと足りる、という理屈も成り立つかもしれない。

しかし、本作品には脇役が多く登場する。その中でも、具体的な言動が描かれ、脇役の中で最も多く登場するのが、今回取り上げる「小舎人童」である。

だが、小舎人童に関する先行研究は少なく、『和泉式部日

記^①の小舎人童について全体的に述べた先行研究も当然のことながら少ない。例えば、千葉千鶴子氏は、第三人称的記述の混乱の理由を小舎人童に見、磯村清隆氏は、『全講和泉式部日記』が指摘した、「超越的視点」との関わりを論じ、大谷裕昭氏は、小舎人童の物語への登場の意味^⑤のみを論じられた。このように、『和泉式部日記』に登場する小舎人童を取り上げた研究はあるが、最終的な結論が『和泉式部日記』そのものの構造についてのものであり、『和泉式部日記』内的小舎人童そのものに対する考察はほとんど存在しない。そのため、本論では、小舎人童が『和泉式部日記』全体を通して、どのような役割を果たしているのか考察していきたい。

一 平安時代貴族社会における小舎人童について

一般的に平安時代貴族社会において小舎人童とはどのようなものだったのだろうか。『日本国語大辞典』第二版^⑥には次のようにある。

公家や武家につかわれて、身の雑用をつとめた召使の少年をいう。

特に平安時代、近衛の中將、少將などが召し使った童子。

また、平安時代の小舎人童について考察された前田禎彦氏は次のように述べている。^⑦

一般的にいつて、小舎人童は、主人の身の雑用様々な面にわたって奉仕していたと想像できるが、昼の外出はもちろん、夜の忍び歩きに際しても常に主人に付き従い、女性関係をはじめ、最もプライベートな領域で駆使された点に特色がある。物語・説話で、男女の仲をとりもつ役割や、転機により危機を回避する役割が与えられているのは、そうした小舎人童の奉仕の内容・性格にもとづくものであった。要するに、小舎人童は、様々な従者の中でも主人に最も密着した存在だったと考えられる。

主人の身の雑用をする点では、おそらく他の従者と同じ

ような性格をしていたのだろう。しかし、傍線部のように最もプライヴェートな領域で駆使され、主人に密着した存在というのは、小舎人童にとって特徴的な性格だと思われる。

では、『和泉式部日記』における小舎人童はどのような存在であったのだろうか。その性格を明確にするために、もう一人の従者である右近の尉について、まず見ていきたい。

二 『和泉式部日記』における従者

右近の尉

『和泉式部日記』には小舎人童以外にもう一人従者が登場する。それが右近の尉である。右近の尉は小舎人童と同じく、帥の宮に仕えている。はたして帥の宮にとって右近の尉はどのような存在だったのだろうか。

思ひかけぬほどに忍びてとおぼして、昼より御心まうけして、日ごろも御文取りつぎて参らする右近の尉なる人を召して、「忍びてものへ行かん」とのたまはすれば、さなめりと思ひてさぶらふ。⁽⁸⁾ (一二三頁)

これは、帥の宮が女の元へ初めて訪れる場面である。帥の宮にとって、女の元へ訪れることを周囲の人に知られる訳にはいかない。忍んで会いに行くような相手であるため、普段から口に出すことも気を付けなければならない状況だろう。

そんな中、傍線部にあるように、帥の宮が「忍びてものへ行かん」と言っただけで、右近の尉は、帥の宮の訪ねる先が女の所だと分かっている。右近の尉は帥の宮と普段から近い関係にいたから、このようにすぐに帥の宮の意図を理解できたのだと考えられる。

初めて女のもとへ行く際、周囲の人に知られる訳にはいかない状況下で、帥の宮は従者として右近の尉を連れて行っている。それは、帥の宮から信頼されているということではないだろうか。

では、女にとって右近の尉はどのような存在だったのだろうか。

かくてのちもなほ、間遠なり。月の明かき夜、うち臥して「うらやましくも」などながめらるれば、宮に聞こゆ。

月を見て荒れたる宿にながむとは見に来ぬまでもたれに告げよと

樋洗童して、「右近の尉にさし取らせて来」とてやる。御前に人々して、御物語しておはしますほどなりけり。人まかでなどして、右近の尉さし出でたれば、「例の、車の装束させよ」とて、おはします。(三二頁)

これは、帥の宮からの訪れが遠のいてるときに女から歌を送った場面である。この場面で女は樋洗童に「右近の尉にさし取らせて来」と、右近の尉を指名している。女が手紙を託したのは、他の者でも小舎人童でもなく右近の尉なのである。

実は、これより前の場面で、女から歌を送ったがうまく届かなかったことがあった。

つごもりの日、女、

ほととぎす世にかくれたる忍び音をいつかは聞かん
今日も過ぎなば

と聞こえさせたれど、人々あまたさぶらひけるほどにて、

え御覽ぜさせず。つとめて持て参りたれば、見給ひて、

忍び音は苦しきものをほととぎす木高き声を今日よりは聞け

とて、二三日ありて、忍びてわたらせ給へり。(二七頁)

この場面も帥の宮の訪れが遠のいてるときに女から歌を送っている。しかし、傍線部にあるように、帥の宮の元へすぐに届けることが出来ず、帥の宮が見たのが翌朝になってしまい、女の元へ訪れるのも二、三日空いてしまっている。このような失敗をしないように、自分の思いを確実に帥の宮に届けられるよう、右近の尉を指名したのだろう。右近の尉に渡したおかげか、帥の宮はすぐに女の所へやって来る。このことから、右近の尉は女からも信頼されていることが分かる。このように右近の尉は、忍びの恋の仲立ちとして相手に確実に思いを届けることができ、恋愛を成就させる能力の高い人物であったと考えられる。

恋愛の当事者達に高く信頼されている右近の尉だが、一方で周囲の人からはあまり良い人物ではなかったようだ。

かるがるしき御歩きは、いと見苦しきことなり。そがなかにも、人々あまた来かよふ所なり。便なきことも出でまうできなん。すべてよくもあらぬことは、右近の尉ながしがしはじむることなり。故宮をも、これこそ率て歩きたてまつりしか。よる夜中と歩かせ給ひては、よきことやはある。かかる御供に歩かむ人は、大殿にも申さん。世の中は、今日あすとも知らず変はりぬべかめるを、殿のおほしおきつることもあるを、世の中御覽じはつるまでは、かかる御歩きなくてこそおはしまさめ」

(二四頁)

これは、帥の宮が女の家を訪れようとした際に、乳母から出かけることを注意される場面である。当然ながら、帥の宮の行動に対し注意をしているのだが、ここでは右近の尉についても言及されている。傍線部にあるように、以前からよくないことのきつかけは右近の尉であつたことが周囲の人から認知されている。

また、傍線部にあるように、兄の為尊親王も右近の尉を従者としていたことがわかる。為尊親王は『栄花物語』と

りべ野」でも描かれているように、和泉式部らのもとに「御夜歩き」を重ね、そのために病を得て亡くなっている。帥の宮の乳母からしてみれば、兄宮の夜歩きを先導した右近の尉こそ兄宮が亡くなつた原因のひとつであると思つのであろう。兄・為尊親王がなくなつた今、帥の宮も東宮候補に挙がつており、兄と同じようになつては困るのである。だからこそ、当時政權をにぎつていた藤原道長にも、右近の尉のことを報告すると言っている。周囲の人間にとつて女の所へ通つことがどれだけ良くないことであつて、そのきつかけと思われるている右近の尉が厄介な存在であるのかがうかがえる。

しかし、帥の宮と同様に兄の為尊親王も右近の尉を引き連れていたことから、右近の尉は、側に仕えさせておくには本当に信頼できる存在であつたのではないだろうか。

乳母などから厄介者だと思われる一方で、恋の当事者から信頼され、恋愛成就においての能力も高い右近の尉だが、右近の尉が登場する場面は引用した三場面と終盤に一場面、合計で四場面しか登場しない。さらに、終盤の一場面を除いた三場面は本作品の序盤に位置する。これだけ活躍しており、今後活躍するであろうと思われる右近の尉だが、意外にも

早くに一時退場してしまうのである。また右近の尉の具体的な言動が描かれるのも、帥の宮が女の元へ初めて訪れる場面しかない。

この右近の尉よりも多く登場し、具体的な言動が描かれているのが「小舎人童」なのだ。

三 『和泉式部日記』における従者

小舎人童

三 一 女からみた小舎人童

女にとって小舎人童とはどのような存在だったのだろうか。

夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ明かし暮らす
 ほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下くらがりも
 てゆく。築地の上の草あをやかなるも、人はことに目も
 とどめぬを、あはれとながむるほどに、近き誘垣のもと
 に人のけはひすれば、たれならんと思ふほどに、故宮に
 さぶらひし小舎人童なりけり。(九頁)

この場面は本作品の冒頭部分である。今は亡き為尊親王の事を嘆き悲しみながら暮らしている所に小舎人童が登場する。主人公の女の次に登場するのが、この小舎人童なのである。ここでの女は傍線部にあるように、亡くなった為尊親王のことを想い嘆き悲しんでいるだけである。続く場面でも同様に、女は為尊親王のことばかり考えている。

あはれにもののおぼゆるほどに來たれば、「などか
 久しく見えざりつる。遠ざかる昔の名残りにも思ふを」
 など言はすれば、「そのこととさぶらはでは、なれなれ
 しきさまにやと、つつましうさぶらぶうちに、日ごろは
 山寺にまかり歩いてなん。いとたよりなく、つれづれに
 思ひ給うらるれば、御かはりにも見たてまつらんとてな
 ん、帥の宮に参りてさぶらふ」と語る。「いとよきこと
 にこそあなれ。その宮は、いとあてに、けけしうおは
 しますなるは。昔のやうにはえしもあらじ」など言へば、
 「しかおはしませど、いとけ近くおはしまして、」つ
 ねに参るや、と、問はせおはしまして、参りはべり
 と申しさぶらひつれば、「これもて参りて、いかが見給

ふとてたてまつらはせよ」とのたまはせつる」とて、橘の花をとり出でたれば、「昔の人の」と言はれて、「さらば参りなん。いかが聞こえさすべき」と言へば、ことばにて聞こえせんもかたはらいたくて、「なにかは、あだだしくもまだ聞こえ給はぬを、はかなきことをも」と思ひて、

薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばや同じ声
やしたると

と聞こえさせたり。(九 一一頁)

この引用は前の冒頭部の続きの場面である。傍線部 にあるように、女は為尊親王のことが忘れられず物思いにふけていたことが強調されている。そんな女が久しぶりに訪れた小舎人童を見て思ふのは、傍線部 「遠ざかる昔の名残りにも思ふを」である。女にとつて小舎人童は、為尊親王と唯一思ひ出を共有できる存在、心の頼りとなる存在なのである。

しかしそんな小舎人童は今、為尊親王の弟の帥の宮に仕えている。ここで初めて女は小舎人童が帥の宮に仕えていることを知ることになる。女は当初帥の宮に対し、傍線部 にあ

るように、「高貴で近寄り難く、なによりも為尊親王とは違うのだ」と思っている。しかし、小舎人童は傍線部 にあるように、「たしかにそうかもしれないけれど、とても親しみやすいところもあるのだ」と女に教える。女は、自分の想像していた帥の宮のイメージとは違う様子を小舎人童から知らされるのである。以前、為尊親王に仕えていた小舎人童が言うことにより、帥の宮に対して女が興味を示したことが、すぐに返歌することからも理解できよう。

これをきっかけに、女の心はすこしずつ変化していく。

恋と言へば世のつねのと思ふらん今朝の心はたく
ひだになし

御返り、

世のつねのこととも更に思ほえずはじめてものを思ふ
ふ朝は

と聞こえても、「あやかしかりける身のありさまかな、故宮の、さばかりのたまはせしものを」と悲しくて思ひ乱るほどに、例の、童来たり。「御文やあらん」、と思ふほどに、さもあらぬを「心憂し」と思ふほど、すき

ずきしや。帰り参るに聞こゆ。(十五 十六頁)

これは、帥の宮が女のもとへ初めて訪れた後に、後朝の文が届き歌を返した場面である。故為尊親王がまだ忘れられないにもかかわらず、帥の宮と関係ができたことに悲しく思い乱れているところに小舎人童が現れる。

傍線部にあるように、女は帥の宮からの文があると期待するも、そうではなく気落ちして情けないと思うのだ。ここではすでに、女にとって小舎人童は、帥の宮からの文や情報を届けてくれる嬉しい存在へと変化し始めている。

これまで小舎人童は故為尊親王との繋がりを持っていた存在だったが、少しずつ帥の宮との繋がりをもたらしにくる存在になり始めている。次の引用は二人の関係に小舎人童が深く関わる場面である。

かかるほどに八月にもなりぬれば、つれづれもなくさめむとて、石山に詣でて、七日ばかりもあらんとて詣でぬ。宮、「久しぶもなりぬるかな」とおぼして、御文つかはすに、童、「ひと日まかりてさぶらひしかば、石山

になん、このごろおはしますなる」と申さすれば、「さは、今日は暮れぬ、つとめてまかれ」とて、御文書かせ給ひて、たまはせて、石山に行きたれば、仏の御前にはあらで、ふるさとのみ恋しくて、「かかる歩きもひきかへたる身のありさま」と思ふに、いともの悲しうて、まめやかに仏を念じたてまつるほどに、高欄の下の方に、人のけはひのすれば、あやしうて、見下ろしたれば、この童なり。

あはれに、思ひかけぬ所に來たれば、「なにぞ」と問はすれば、御文さし出でたるも、つねよりもふとひきあけて見れば(中略)近うてだに、いとおぼつかなくなし給ふに、かくわざとたづね給へる、をかしうて、

「あふみちは忘れぬめりと見しものを聞うち越えて問ふ人やたれ

いつか、とのたまはせたるは。おぼるけに思ひ給へ入りにしかば、

山ながら憂きは立つとも都へはいつか打出の浜は見るべき」

と聞こえたれば、「苦しくとも行け」とて、(三八 三九

(頁)

これは、女が石山寺へ参詣するも、都を恋しく思い、以前と変わってしまった自分を嘆き悲しんでいるところに小舎人童が現れる場面である。

小舎人童に気が付いた女は傍線部にあるように、はつとうれしく思っている。さらに、帥の宮からの文を小舎人童からもらうと女は、傍線部にあるように、いつもより急いでひき開けて見る。小舎人童が現れたのが相当嬉しかったのだろう。なぜならば、小舎人童は帥の宮との繋がりをもたらす存在だからである。この場面では、小舎人童は女にとって故為尊親王の思い出のよすがではなく、帥の宮との繋がりを示し、帥の宮からの文という女にとって嬉しいものを運んでくれる存在に完全に变化しているのだ。⁽¹⁰⁾

石山寺は現在の滋賀県大津市に存在する。わざわざ都から石山寺まで文を届けてくれることに対して、傍線部にあるように嬉しく思っている。その女の嬉しさを生み出したのは小舎人童なのである。

この後、早く山を出てきてほしいと帥の宮から言われ、女

は自ら石山寺を出て都へ戻ってくる。女が距離のある石山寺から都へ戻ってくることは、女が帥の宮のいる都に自分から向かっていることになる。これは、帥の宮と女の間にあった距離が縮まっていることの比喩になっているのではないだろうか。それをもたらしたのが小舎人童なのである。次に、小舎人童の存在が二人の間をより縮めていく事件を見てみたい。

その夜の月の、いみじう明かくすみて、ここにも、かしこにも、ながめ明かして、つとめて、例の、御文つかはさんとて、「童、参りたりや」と問はせ給ふほどに、女も、霜のいと白きにおどろかされてや、

手枕の袖にも霜はおきてけり今朝うち見れば白妙にして

と聞こえたり。「ねたう先ぜられぬる」とおぼして、

つま恋ふとおき明かしつる霜なれば

とのたまはせたる今ぞ、人参りたれば、御気色あしうて問はせたれば、「とく参らで。いみじうさいなむめり」ととて取らせたれば、もて行きて、「まだこれより聞こ

えさせ給はざりけるさきに召しけるを、今まで参らず、

とてさいなむ」とて、御文取り出でたり。「昨夜の月は、
いみじかりしものかな」とて、

寝ぬる夜の月を見るやと今朝はしもおき居て待てど
問ふ人もなし

「げに、かれよりまづのたまひけるなめり」と見るも、
をかし。

まどろまでひと夜ながめし月見るとおきながらしも
明かし顔なる

と聞こえて、この童の「いみじうさいなみつる」と言
ふがをかしうて、端に、

「霜の上に朝日さすめり今ははやうちとけにたる
気色見せなん

いみじうわび侍るなり」とあり。「今朝したり顔におほ
したりつるも、いとねたし。この童、殺してばや、とま
でなん。

朝日影さして消ゆべき霜なれどうちとけがたき空の
気色ぞ

とあれば、「殺させ給ふべかなるこそ」とて、

君は来すたまたま見ゆる童をばいけとも今は言は

じと思ふか

と聞こえさせたれば、笑はせ給ひて、

「こわりや今は殺さじこの童 忍びのつま」の言ふ
ことにより

手枕の袖は、忘れ給ひにけるなめりかし」とあれば、

人知れず心にかけてしのぶるを忘るとや思ふ手枕の
袖

と聞こえたれば、

もの言はでやみなましかばかけてだに思ひ出でまし
や手枕の袖（五四 五六頁）

これは帥の宮が女に文を書くもそれを届ける小舎人童が遅
刻し、女からの文が先に届いてしまう場面である。この場面
では、「手枕の袖」が注目されが^①ちだが、小舎人童が二人の
話題となり、重要な役割を果たしている。

女は自分が文を届けた後に帥の宮から文が届いたことに対
して、傍線部 のように帥の宮から先に歌を詠んだのだらう
と分かるのが嬉しい、と思うのである。これは小舎人童が必
死に傍線部 のように、帥の宮が自分の遅刻を責めるのだ、

と女に訴えたからだろう。⁽¹²⁾

さらに傍線部 にあるように小舎人童が、帥の宮がひどく責めるのだと言っていることに面白いと感じている。これは、小舎人童が女に必死に訴えている姿を面白いと感じているのと、遅刻した小舎人童にこれほどまで憤慨する帥の宮のことも面白いと感じているのではないだろうか。年下の宮がこんなにも必死になっている姿にどこか可愛らしいと、年上の余裕をみせているのだろう。

女の年齢は推定二六歳⁽¹³⁾、帥の宮の年齢は二三歳、およそ三歳差がある。また、女は以前、帥の宮より四歳上の為尊親王と関係があった。帥の宮は兄を意識していることだろう。今まで背伸びをし、大人らしくいようとしていたのではないだろうか。そんな帥の宮がここでは、子どもっぽく憤慨しているのだ。いつも以上に歳の差が感じられ、女もより年上の余裕をみせているのだ。余裕を見せられるということは、女の心が安定しているからではないだろうか。帥の宮の自分への好意を感じ、心が満たされているのである。

そんな帥の宮に女は傍線部 の和歌にあるように小舎人童を許してやったらどうかとため、小舎人童という二人の共

通の話題で贈答が繰り返される。しかし、女が傍線部 の和歌を帥の宮へ送るも、帥の宮は「殺してばや」と過激な言葉を使つて返事をよこす。女と帥の宮との感情の差が激しい。この「殺してばや」という言葉について川村裕子氏は次のように述べている。⁽¹⁴⁾

ここで宮は童のことを「殺す」とまでののしっているのです。当時「殺す」という単語は、あまりにも荒く猛々しいイメージなので、使われることがありませんでした。それを使うということは、童の手抜きを許せない怒りと、「手枕の袖」を先に詠まれたことに対する屈辱が並大抵ではないことをあらわしています。

女がなだめたのにもかかわらず、帥の宮が憤慨し続けるのは、それだけ女のことを想っているからであり、女もそのことを感じている。だからこそ、女は再び傍線部 の和歌を帥の宮へ返したのだろう。

傍線部 の和歌は、小舎人童を気遣い、小舎人童のことを想つて詠んだ和歌であった。一方、傍線部 の和歌は、小舎

人童が和歌に詠まれるが、帥の宮を想い、帥の宮に向けた和歌になっている。せつかく、帥の宮の想いを感じたのだ。憤慨したままではいてほしくない。お互いが楽しい気持ちでいたいと思ったのだろう。返歌の甲斐があつてか、帥の宮は笑い、機嫌を直し、小舎人童を許すと心を変えるのである。帥の宮をなだめるこのやりとりを女は楽しんでるように思える。ここでも、小舎人童は二人を結び存在なのだ。

そして、ここで初めて帥の宮から「忍びのつま」と歌の中認定される。二人の距離がさらに縮まり、二人の仲も強いものになっていったことが分かる。帥の宮も「忍びのつま」の女だからこそ、「殺してばや」と憤慨していた心を落着かせたのだろう。女は、帥の宮の好意を確かな形で感じており、これをもたらししたのも小舎人童である。

この贈答歌のやりとりは、意図的ではないにしろ小舎人童の遅刻が一つのきっかけで起きたものだ。小舎人童の訴えから見える帥の宮の言動の子どもっぽさと、それをなだめる女のやりとりを通して、帥の宮から「忍びのつま」と言われることにつながる。結果的には、帥の宮の愛を感じることできるやりとりになったのである。

さて、女と帥の宮との恋の架け橋となっている小舎人童だが、そんな小舎人童にも恋人が存在した。

小舎人童来たり。樋洗童例も語らへば、ものなど言ひて、「御文やある」と言へば、「さもあらず。ひと夜おはしましたりしに、御門に車のありしを御覧じて、御消息もなきにこそはあめれ。人おはしまし通ふやうにこそ聞こしめしげなれ」など言ひて去ぬ。「かくなん言ふ」と聞こえて、「いと久しう、なによかよと聞こえさすることもなく、わざと頼み聞こゆることこそなけれ、時々もかくおぼし出でんほどは、絶えであらんとこそ思ひつれ。ことしもこそあれ、かくけしからぬことにつけてかくおぼされぬ」と思ふに、身も心憂くて、「なぞもかく」と嘆くほどに、御文あり。(三三三 三四頁)

これは、小舎人童が女に仕えている樋洗童に会いに来て、いつものように話をして帰る場面である。傍線部にあるように、普段から樋洗童に会いに来ており、仲睦まじいことが分かる。この作品の最後は帥の宮の邸に女が住むことになるが、

それを先取りするかのように、帥の宮に仕える小舎人童と、女に仕える樋洗童が結ばれているのだ。この描写は読者に女と帥の宮とのこの先を予感させ、また女にも無意識的に帥の宮と結ばれることを想像させていたのではないだろうか。

ここで女からみた小舎人童の役割をまとめてみる。小舎人童は、為尊親王から帥の宮へと女の心を動かす存在、二人の仲を近づける存在、二人の共通の話題となる存在、二人の今後を予感させる存在、であると言える。

三 二 帥の宮からみた小舎人童

では、帥の宮にとって小舎人童はどのような存在だったのだろうか。

まだ端におはしましけるに、この童、かくれの方に気色ばみけるけはひを御覧じつけて、「いかに」と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば、御覧じて

同じ枝になきつつをりしほととぎす声は変はらぬもの
のと知らずや

と書かせ給ひて、たまふとて、「かかること、ゆめ人に

言ふな。すぎがましきやうなり」とて、入らせ給ひぬ。

(二頁)

これは、冒頭で小舎人童が女に橘の花を渡した後、その返事を持って、帥の宮の元へ帰ってきた場面である。帥の宮は更に女に返事をするが、その際、傍線にあるように、「このことは決して人に言つてはならない」と小舎人童に対し口止めしている。この場面では帥の宮にとって小舎人童はまだ完全に信頼することができない存在ではないのだろうか。

そんな小舎人童だが、橘の花を女の元へ届けたように、何かを届けることに關しては忠実に働いていたようである。

かかるほどに八月にもなりぬれば、つれづれもなぐさめむとて、石山に詣でて、七日ばかりもあらんとて詣でぬ。宮、「久しうもなりぬるかな」とおぼして、御文つかはすに、童、「ひと日まかりてさぶらひしかば、石山になん、このごろおはしますなる」と申さすれば、

「さは、今日は暮れぬ、つとめてまかれ」とて、御文書かせ給ひて、たまはせて、石山に行きたれば、(中略)

近うてだに、いとおぼつかなくなし給ふに、かくわざとたづね給へる、をかしうて、

「あふみぢは忘れぬめりと見しものを関うち越えて問ふ人やたれ

いつか、とのたまはせたるは。おぼろけに思ひ給へ入りにしかば、

山ながら憂きは立つとも都へはいつか打出の涙は見るべき」

と聞こえたれば、「苦しくとも行け」とて、(三八

三九頁)

これは、石山寺にいる女の元へ帥の宮が小舎人童に文を届けさせる場面である。最近文を届けていないことに気が付いた帥の宮に、小舎人童は女が石山寺にいることを知らせる。すると、帥の宮は傍線部にあるように、文を届けに翌日の早朝に行つて来いと言つのである。これに対し小舎人童は忠実に働く。帥の宮からの文を女に届け、返事を持ち帰つて来た小舎人童に対し帥の宮は傍線部「苦しくとも行け」と言い、すぐにもう一度文を届けるため、石山寺に行かせるのだ。

前述したように、石山寺は現在の滋賀県大津市に存在する。都から大分距離もあり、小舎人童にとつて相当苦しい道のりだったことだろう。それでも女の元へ忠実に文を届けるのだ。帥の宮にとつて小舎人童は女のもとへ文を届けてくれる忠実な存在であり、帥の宮の想いは必ず女のもとへ届くことになる。

一方、文を女の元へ届ける場面は描かれているが、帥の宮が小舎人童をお供に連れて女の元へ訪れる場面は、本作品の中盤によく描かれる。

九月二十日あまりばかりの有明の月に、御目をさまして、「いみじう久しつもなりにけるかな。あはれ、この月は見らんかし。人やあるらん」とおぼせど、例の、童ばかりを御供にておはしまして、門をたたかせ給ふに、女、目をさまして、よろづ思ひつづけ臥したるほどなりけり。(四二頁)

これは、先ほどの石山詣での後、都へ戻ってきた女の元へ訪れる場面である。

冒頭で口止めをしていた場面から考えると信頼感も高まっているのだろう。結局、この場面では女と会うことはできないが、二人の仲は崩れることはない。おそらく、前の場面での石山詣でのやりとりが大きく影響しているのだろう。小舎人童が頑張った分、二人の仲はより近づいたのだ。帥の宮の小舎人童に対する信頼も、石山詣でによって高まったと言える。帥の宮の小舎人童への信頼が高まるほど、女との距離が縮まっているのである。帥の宮にとって小舎人童との距離は女との距離を表したものだ。

そんな帥の宮の命令に忠実に従い、帥の宮からの信頼感も高まってきた小舎人童だが、重大な失敗を犯してしまつのである。それが三一でも見た童の遅参事件である。ここでは帥の宮側からの視点で考察してみたい。

その夜の月の、いみじう明かくすみて、ここにも、かしこにも、ながめ明かして、つとめて、例の、御文つかはさんとて、「童、参りたりや」と問はせ給ふほどに、女も、霜のいと白きにおどろかされてや、

手枕の袖にも霜はおきてけり今朝うち見れば白妙に

して

と聞こえたり。「ねたう先ぜられぬる」とおぼして、

つま恋ふとおき明かしつる霜なれば

とのたまはせたる今ぞ、人参りたれば、御気色あしう

て問はせたれば、「とく参らで。いみじうさいなむめ

り」とて取らせたれば、もて行きて、「まだこれより聞

こえさせ給はざりけるさきに召しけるを、今まで参らず、

とてさいなむ」とて、御文取り出でたり。「昨夜の月は、

いみじかりしものかな」とて、

寝ぬる夜の月は見ると今朝はしもおき居て待てど

問ふ人もなし

「げに、かれよりまつのたまひけるなめり」と見るも、

をかし。

まどろまでひと夜ながめし月見るとおきながらしも

明かし顔なる

と聞こえて、この童の「いみじうさいなみつる」と言ふ

がをかしうて、端に、

「霜の上に朝日さすめり今ははやつちとけにたる気

色見せなん

いみじうわび侍るなり」とあり。「今朝したり顔におぼしたりつるも、いとねたし。この童、殺してばや、とまでなん。」

朝日影さして消ゆべき霜なれどうちとけがたき空の気色ぞ

とあれば、「殺させ給ふべかなるこそ」とて、

君は来ずたまたま見ゆる童をばいけとも今は言はじと思ふか

と聞こえさせたれば、笑はせ給ひて、

「ことわりや今は殺さじこの童 忍びのつま の言ふことにより

手枕の袖は、忘れ給ひにけるなめりかし」とあれば、

人知れず心にかけてしのぶるを忘るとや思ふ手枕の袖

と聞こえたれば、

もの言はでやみなましかばかけてだに思ひ出でまし

や手枕の袖 (五四 五六頁)

前述したように、帥の宮が女に文を書くもそれを届ける小

舎人童が遅刻し、女からの文が先に届いてしまつ場面である。小舎人童が遅刻したことで帥の宮が憤慨している。傍線部、にあるように、帥の宮は機嫌が悪く、小舎人童の遅刻をひどく責めている。女にも、傍線部 にあるように、「この小舎人童を殺したいと思つている」と、伝えている。今まで忠実に帥の宮に従つており、確実に文や自分の想いを届けていた小舎人童が、ここではそれを遂行することができないのだ。しかし、帥の宮は傍線部 にあるように、小舎人童を指名している。加えて、小舎人童が来るのが遅いことから、違つて者に行かせれば良いところを、帥の宮は小舎人童にこだわるのだ。なぜ、帥の宮はここまで小舎人童にこだわるのだろうか。

まず、一つ目の理由として、小舎人童は、二人の仲を妨げない安全な存在であるからだろう。右近の尉などの成人の従者であると、万が一女に好意を抱き、女との恋の障害になリかねない。前述したように、女は右近の尉を充分信頼している。女も信頼している右近の尉であれば、女の信頼が恋へと発展することは充分に考えられる。また、女は受領階級の娘である⁽¹⁵⁾。親王である帥の宮よりも、右近の尉の方が身近に感

じている可能性が考えられる。

帥の宮にとつてこの場面では、女は誰にも奪われたくない人になっている。ひとつ前の場面で女に自邸に入る誘いもしていることから、真剣に女との関係を考えており、恋の障害は一つでも取り除いておきたいのである。

次に二つ目の理由として、右近の尉が自由に動くことができないことが考えられる。前述したように、右近の尉は周囲の人間から要注意人物として扱われている。右近の尉が乳母などの周囲の人たちの監視下にある今、帥の宮は小舎人童しか頼ることが出来ない可能性が高い。帥の宮にとつても小舎人童は女と繋がりをもたらししてくれる存在になっているのだ。

右近の尉の状況と小舎人童の存在を考えてみると、やはり帥の宮の小舎人童への信頼は高まっていることが分かる。前述したように、小舎人童との信頼感の高まりは、女との仲が近づいていることを表している。さらに、帥の宮がひどく憤慨するこの場面から、女との距離が近づいたことが分かる。帥の宮がここまで憤慨するのはこの場面しかない。小舎人童が遅刻したことをむきになり、ここまで憤慨するのは、どこか子どもっぽく、年下な部分が出ているように感じる。帥の

宮の素が出ているようにも思える。女に心を許しているから、あるいは女が心を許せる存在になったから、素が出たのだから。そして、この場面で初めて帥の宮は女に「忍びのつま」だと言う。女との距離が近づいたから出た言葉であり、帥の宮の女への本気の思いがうかがえる。

ここで帥の宮から見た小舎人童の役割をまとめてみる。小舎人童は、文を届けるなど帥の宮の命令に忠実に従う者、小舎人童と帥の宮との信頼が高まると、帥の宮と女との仲が近づき、一種のバロメーターのようなもの、二人の仲を妨げない安全な存在、帥の宮にとつても女との繋がりをもたらししてくれる存在、であると言える。

おわりに

『和泉式部日記』における小舎人童の役割について、本文を見ながら考察してきた。そこから次のことがわかった。

女の心を為尊親王から帥の宮へ動かす存在。

二人の仲を近づける存在。

二人の今後を予感させる存在。

帥の宮の命令に忠実に従う存在。

二人の仲を妨げない安全な存在。

これだけ多くの役割を小舎人童は一人で行っている。本来であればこれらは右近の尉が行うはずなのだろう。しかし、小舎人童は一人で出来るようになっていて、この作品が進むにつれ小舎人童は成長していったのだろう。小舎人童が一人で行うことができる今、右近の尉が登場することは必要なくなったのである。

また、小舎人童は二人のポイントとなる場面で登場している。特に作品冒頭部、石山詣での場面、小舎人童の遅参事件の場面である。これらの場面では作品を動かす起爆剤になっているのだ。

本作品で小舎人童が最後に登場する場面は次のように描かれている。

このごろは四十五日の忌違へせさせ給ふとて、御いとこの三位の家におはします。例ならぬ所にさへあれば、「見苦し」と聞こゆれど、しひて率ておはしまして、御車ながら人も見ぬ車宿りにひき立てて、入らせ給ひぬれ

ば、おそろしく思ふ。人静まりてぞおはしまして、御車にたてまつりて、よろづのことをのたまはせ契る。心えぬ宿直のをのこともぞめぐり歩く。例の、右近の尉、この童とぞ近くさぶらふ。(六四頁)

これまで見てきた場面とは違い、具体的な言動は描かれていない。二人の会話の話題にもなっていない。ただ、車の側に仕えているだけである。この場面は三位の家にいる帥の宮が、人の家であるのに女を無理に連れてきて、女を車に乗せたまま車宿りに女を残す場面である。

「人も見ぬ車宿り」とはいえ、周囲には宿直の男たちが歩いている。この危険な状況にいる二人の秘密の逢瀬を守るかのように、右近の尉と小舎人童は側に仕えている。右近の尉は元々二人から信頼されていたが、ここでは小舎人童も二人から信頼されていることが分かる。この危険な状況下でも、右近の尉と小舎人童が側に仕えていれば大丈夫だと二人から思われているのだろう。秋澤互氏も「二人の逢瀬を守護し、余人を寄せつけぬ頼もしい存在」「彼らには、二人を支援し、二人を衛護するという、一種特別な役割が課せられているら

しいのである。」と述べている。⁽¹⁶⁾

小舎人童は最初、帥の宮から「かかること、ゆめ人に言ふな。すぎがましきやうなり」と、二人の秘密を周囲に話すなと命令されていた。しかし、この場面では、二人の秘密を守る立場に変化している。小舎人童が右近の尉と同じ働きをするように成長したといえるだろう。

この場面の後、右近の尉も小舎人童もいつさい作品の中に登場しない。誰かの会話の中に登場することもないのだ。この場面の直後、女は帥の宮の邸へ入ることを決意する。二人の従者は今までの役割を終え、これからは二人だけで進んでいくのだと示すかのように、この場面で姿を消すのである。

この『和泉式部日記』において小舎人童はただの脇役ではない。⁽¹⁷⁾多くの役割を持ち、二人の恋を導き、作品を動かす力を持った、重要な登場人物なのである。

註

(1) 磯村清隆『和泉式部日記』の脇役の機能 童たちの活躍
 (『大阪城南女子短期大学研究紀要』二五巻、一九九〇年十二月、一頁引用)

(2) 千葉千鶴子『和泉式部日記』私見 執筆事情をめぐる覚書(一)「小舎人童」登場の意味(『帯広大谷短期大学紀要』八巻、一九七〇年十二月)より、「告発者として、断罪者として、証人として、時には被告人となり、帥宮と和泉式部の恋を誘導してきた小舎人童が、その視覚を錯綜した時、つまり小舎人童が錯角をもった時、筆者『和泉式部』女という同一の視角を生ずる。引用した論文の諸説における第三人称的記述の混乱と指摘されてきたのは、まさにこの小舎人童の視角をもって綴りあげられた場における混乱でもあった。(中略)第三人称的記述の場に設置された小舎人童の視角は、筆者をくまなく映しだす萬華鏡であった。」(六三頁、六五頁)と述べている。

(3) 円地文子、鈴木一雄『全講和泉式部日記 改訂版』(至文堂、一九八三年)

(4) 前掲(1)論文に同じ。同論文で、「和泉の生活圏からへだたった時・所について描写が、自由に処理されるためには、どうしても視点が主人公の身に貼り付いては不自由なのだ。表現の視点が帥宮邸での出来事(帥宮の言動が中心)そのものを描写できる位置に移動する必要がある場合に、その視点の移動を媒介する要素としての童の行動が記述されるのだろ

う。二人の間を歩き来する童、和泉にとって帥宮との間をうまく紐帯である童は、そうした媒介として、まさにつてつけの存在だったのだ。主人公和泉の視野からはずれて、作品内世界で自由に主体的に活動するキャラクター 童は、以上のような作品形成の必然から、要請に応えて登場し、描かれることになったのではないだろうか。(中略) 童たちの跳梁のために、この作品はもはや、いわゆる「身の上のみする日記」の枠内には留まっていけないのである、と。すなわち、その恋愛手記を構成するにあたって、陰の存在として、本来なら描かれるまでもないはずの仲介役「童」が、このような形で登場させられている。そしてそのために、『和泉式部日記』テキストは、『和泉式部物語』へと志向してしまう宿命を背負い込んだのであった。(一〇頁 一一頁)と述べている。たしかに、作品冒頭で、『つねに参るや』と帥の宮から尋ねられる場面や、帥の宮からの文を持たず、樋洗童に会いに来る場面を考えると、小舎人童は、「自由に主体的に活動するキャラクター」であると言えるかもしれない。しかし、基本的には、帥の宮の命令によって小舎人童は行動しており、行動に制限があると考えられるため、作品全体での小舎人童の性格として「作品内世界で自由に主体的に活動するキャラクター」と位置づけるのは適切ではないと考える。

(5) 大谷裕昭「小舎人童の出現 『和泉式部日記』を中心に」(『日本文学誌要』四五巻、一九九二年三月)より、「世の人聞きにさらされている貴族社会の息苦しさ・不自由さ、

ひとりでは何ひとつできない無力さをひとり思い知りつくし、忍ぶ恋の真実、北の方の退去の真相を訴えての日記執筆において、和泉は、下人のひととして生きている姿を発見していったのである。」(二二頁 二三頁)と述べている。

(6) 『日本国語大辞典 第二版』第五巻、小学館、二〇〇一年
(7) 前田禎彦「小舎人童考 平安時代の王族・貴族の従者」(『人文研究』一八六号、二〇一五年) なお、引用文の傍線は稿者による。

(8) 本文の引用は、近藤みゆき訳注『和泉式部日記』(角川ソフィア文庫、二〇〇三年)により、ページ数を付記した。また、本文の傍線、囲み線は稿者によるもの。

(9) 秋山虔、山中裕、池田尚隆、福永武彦、校注・訳『新編日本古典文学全集31 栄花物語(1)』(小学館、一九九五年)「彈正宮うちはへ御夜歩きの恐ろしさを、世の人やすからず、あいなきことなりと、さかしらに聞えさせつる、今年はおほかたいと騒がしう、いつぞやの心地して、道大路のいみじきに、ものどもを見過ぐしつあさましかりつる御夜歩きのしるしにや、いみじうわづらはせたまひて、うせたまひぬ。このほどは新中納言、和泉式部などに思しつきて、あさましきまでおはしましつる御心ばへを、憂きものに思しつれど、上はあはれに思し嘆きて、四十九日のほどに厄になりたまひぬ。」(三五六頁 三五七頁)

(10) 前掲(1)論文に同じ。同論文で、「ここですすでに、帥宮からの消息をもたらしてくれる「嬉しい存在」と認識され

ている。」(四頁)とあり、藤川晶子『和泉式部日記』に見える作者意識と場面性」(『国文学』(関西大学国文学会) 八三ノ八四巻、二〇〇二年一月)より、「この八月石山参詣の時点では、すでに帥宮と和泉式部の関係が成立し、ある程度安定していることが前提となっており、」(一〇七頁)と論じられているのを参考にした。

- (11) 例えば、前掲(2)論文、前掲(5)論文、古賀典子、三田村雅子校注・訳『日本の文学古典編17 紫式部日記 和泉式部日記』(ほるぷ出版、一九八七年)などで指摘されており、藤岡忠実、中野幸一、犬養廉、石井文夫校注・訳『新編日本古典文学全集26 和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』(小学館、一九九四年)では、章の表題が「二九」童の文使い ふたたび手枕の袖」とある。

- (12) 川村裕子『王朝の恋の手紙たち』(角川グループパブリッシング、二〇〇九年)より、「宮の怒りの矛先は、当然のことながら小舎人童に向かいます。でも、この小舎人童の情報で、和泉の方は知ったのです。宮から先に手紙が出されていたことを。和泉の心は手紙が先に出されたことがわかった瞬間、一気に空が晴れるように、うれしい色に塗り替えられました。」(一六七頁)とある。

- (13) 前掲(8)の解説「七 作者とその人生」より、「和泉の出生年は、あくまで推定によるしかないが、天元元年(九七八)頃と考える説が有力である。」(二三三頁)とある。

- (14) 前掲(12)に同じ。(二六九頁)

- (15) 前掲(8)の解説「七 作者とその人生」より、「父は大江雅致といい、長く太皇太后宮昌子内親王(朱雀天皇皇女、冷泉天皇妃)家の大進をつとめ、木工頭を経て寛弘七年には越前守となった典型的受領官人である。」(二三四頁)とある。

- (16) 秋澤互「孤絶の構造 脇役から見た『和泉式部日記』」(『野州国文学』四九号、一九九二年三月、七四頁引用)。

- (17) 前掲(12)に同じ。同書で、「小舎人童や随人といった、重要な役割を果たしている文使いが何回も登場します。彼らはまるで文使いのお手本のように、風のようにすばやく、そしてまた機転を利かせて働くのです。この人たちがいなければ、和泉式部と敦道親王、彼らの恋の思い 一人ぼっちのさみしさや激しい恋の喜び を届けることはできなかったのです。彼らが運ぶ手紙によって、二人が遠ざかったり、近づいたりしたのです。ある時は雪のように冷たく離れたり、ある時は太陽のように燃え上がる二人の心を運んでいたのは、彼らでした。だから、『和泉式部日記』の文使いたちは、二人の恋を取り持つ、なくてはならない大切な大切な人たちだったのです。」(四七、四八頁)と述べられている。

(文学部日本文学科四年)